No.39 January 2000

UIFA JAPON NEWSLETTER

2000年の新春　あけましておめでとうございます。

1900年代は日本で初めて国際会議を開くことができまして、いささかでも国際的に貢献できたのではないかと自負いたしております。2000年代はもっと厳しい社会情勢の中で、よりよい世界を築くための努力こそ求められています。
どうぞ、皆さま、より一層のご協力をお願い申し上げます。

UIFA　JAPON会長　中原暢子

■海外交流の会
「子どもと環境フォーラム」
小澤紀美子さん・長島キャサリンさん・岩村マグダレーナさん
■連続企画　広がるレースワーク　4
「タリアセンからのたより」　土井由美
「戦災都市の復興支援活動」　大村紋子
DOCOMOMOをご存知ですか
ちょっとひと言「レバーハンドル」　大高真紀子
東京女性財団 1998年度研究助成報告会
役員会報告

■海外交流の会

「子どもと環境フォーラム」—日本・イギリス・ドイツ

五感に触れる体験を大切に

小澤紀美子さん・長島キャサリンさん・岩村マグダレーナさん

1999年10月30日の「子どもと環境フォーラム」は、刺激的で有意義であったと参加者の声。仕事・研究・地域活動、あるいは自身の生活に重ねて考えるなど、ご意見は多数であった。

小澤紀美子さんは、現代社会の中で、五感に触れる体験不足、人と人、大人と子どもの関係不足が、子どもの想像力を希薄化させていると、危機意識を持って語る。生活の場面での表現力や、生きる力、生きる情熱あるいは自己表現不足を指摘する。高度経済成長やバブル崩壊などの結果、内なる崩壊が社会の価値観に影響を及ぼし、子どもたちは、居場所を、安心空間を、人と人とのつながりを、失ってしまった。新しい学習方法として、子どもの目線で住まいやまちを見ようと屋外学習やワークショップを試みての報告など、リアリティのある教育を目指せと説得力のある講話。

長島キャサリンさんは、自発的に環境に触れられる場が大切という。父との散歩、野いちご摘み，雲のかたち、葉のかたち、教会の彫刻、仕事の観察など五感を使って安心できる場所、地域コミュニティを意識することができた子ども時代を大事に感じている。フィールドワークを大切にしたイギリスの教育方法は、体得できる場として「種」であるという。子どもの参加の場づくりなどの

小澤紀美子さん：北海道生まれ。東京学芸大学教授・付属教育実践総合センター長。住居学・住環境問題・環境教育
長島キャサリンさん：イギリス生まれ。現在、AUR建築都市研究コンサルタント取締役。地理学・地域計画
岩村マグダレーナさん：ドイツ生まれ。現在、岩村アトリエ専務取締役。美術史、彫刻、色彩計画

実践活動をしている活動派。また、食事はコミュニケーションの場であり大事にしたい。料理の味を感じて欲しいという。

岩村マグダレーナさんは、ドイツの子どもたちの個性的な部屋と日本の子どもたちのお仕着せの机や机まわりの風景を象徴的に比較して、日本の子どもはアイデンティティを創出できない環境にあると厳しい眼を向けつつ家庭での環境教育の大切さを指摘する。

地域の教育力が無くなったこと、メッセージのしかけのあった下町の暮らし、働く大人を見ながら育つ職住混在、近接の都市論にも及んだフォーラムにおける意見の共通性は、子どもの発達にとって重要な住環境は五感に触れる体験、想像力、コミュニケーションとアイデンティティの創出の図れる場であるといえる。

（吉田・渡辺）

■連載企画　広がるレースワーク　4

UIFA 国際女性建築家会議第 12 回日本大会のその後

タリアセンからの便り

土井　由美

1953年生まれ。第12回大会の発表は、「フランク・ロイド・ライトが残した設計事務所とコミュニティは今」。現在,アメリカのタリアセン在住。

コミュニティが支える設計事務所のその後

アリゾナはもう 11 月というのに、昼は 30 度を越す暑さです。それでも朝方は 15 度ぐらいに冷え込み、秋を感じます。これからがここアリゾナのリゾートシーズン。スノーバードと呼ばれる北の人々が深い雪を避け、開放的なこの気候を楽しみに、長期、短期とやってくるシーズンです。ツアーを行っているタリアセンでは、この時期がかき入れ時です。アメリカ人が誇る建築家フランク・ロイド・ライトの冬の家を、大統領リンカーンの家を見に行くのと同じように、建築関係者ではなく一般のアメリカ人が見に来る訳です。ここにひとつのトリックがあります。UIFA で発表した「コミュニティが支える設計事務所」のその後について、現在直面しているタリアセンの問題を書いてみたいと思います。

タリアセンは、ライトが 65 歳の時に築いた建築をする場所です。ライトはここで設計し、常に 30 人から多いときは 70 人の弟子〔アプレンティス〕と呼ばれた学生を手元に置き、手伝わせることで建築教育をしました。コミュニティライフを営み、親方と弟子は家族のように、共に住み、学び、働いたのでした。彼はすでに知名度のあった建築家でしたが、この新しい生活のなかで、あの落水荘を生み出し、ジョンソン・ワックスビルディングをてがけ、65 歳からますますの活躍をしたのでした。

今、タリアセンは、フランク・ロイド・ライト財団という法人によって運営されています。その下に私の卒業したフランク・ロイド・ライト建築学校、私が今働いているタリアセン・アーキテクツという設計事務所、さらにツアーの部所、ライトの資料の保存部、アーカイブスが入っています。この場所がライトの死後も保存されたのはライト夫人が 1985 年まで生存してライトの弟子と共に守り、夫人の死後は、その弟子たちが存命だったから支えることができたのでした。今その弟子たちは、20 人弱、年齢も 86 歳を筆頭に高齢化しています。その半分は建築家、残りはそのつれあいか芸術家で、皆、昔のように敷地内に住んでいます。30 人ほどの学生や、私のように設計事務所に働くか何らかのかたちで財団に働いている 10 人ほどの卒業生も共に住んでいます。敷地内に住んでいる私達は、フェローシップと呼ばれています。このフェローシップが 60 万坪に及ぶ敷地を昔のように、自ら切り盛りするにはもう無理が出てきました。

カーボーイの街　チュームストーンにて

膨れ上がったツアーの需要はツアーガイドの補充や、建物の整備、ブックストアーの充実を呼び、また、ライトの変わらぬ人気は世界中に展覧会の需要を呼び、その影で働く人々を必要とするにいたりました。80 年代はここに雇われていた人はたったの 2 人だったのに、今は 60 人近くが外からの雇用人です。とっぴな話ですが、アメリカにはユニークな州立公園がたくさんあって、キャンプ場付きで家族連れの健康的なバケーションをサポートしていますが、ここタリアセンはそれにうってつけの場所です。現にアイオア州に、ライトの建物を修復保存して見せている州立公園があります。建物は国の重要文化財なので、州が修復保存してくれればもっといい保存ができるという話もあります。

タリアセンのこれから

その鼻息の荒いツーリズム業の影で、設計事務所は独自で努力しているところです。今、事務所を担っているのは、60 年代から 80 年代にここでフェローシップとして雇われて働いてきた人たちです。ちょうど、お父さんのやっていた設計事務所を、息子たちがつぐかどうか、いわゆる世代交代に直面しています。ライトの直弟子たちはライト風の設計をしてもうそがないけれど、私達がやってはコピーにすぎない。ライトの哲学は尊重しながら独自の方向はないものか模索しています。ビジネスの国アメリカでは、今やビジネス建築家でないとトップになれません。学校をかかえ今だに学生をアプレンティス〔弟子〕と呼んでいるタリアセンに、ここにふさわしい親方がいないのは寂しいことです。

では、波にのっているツーリズムをとって建築は捨てるのか？　そうはいかないのです。現在、ウィスコンシ

ンのタリアセンとアリゾナのタリアセン・ウエストは、支所をそれぞれマディソンとフェニックスにもうけました。2つのタリアセンはもっとタリアセンらしく学生のために学ぶ場所をつくりだし、2つの支所はもっとアメリカのオフィスとしての可能性を探るという作戦です。どんな結果を生み出すかは、何年か先になるでしょう。

寄稿 戦災都市の復興支援活動　大村 紋子

関東郵政局施設部建築課勤務。1997～98年に英国ヨーク大学建築学部戦災復興開発学コースにて、戦災都市の復興支援プログラムをテーマに研究を行った。

トルコ、台湾、コソボ、東ティモール、地震や紛争によって住む家を失った人々を支援する国際活動のニュース映像が次々に届きます。一方、TV に映し出される機会は少ないけれども、紛争が慢性化して本格復興がままならない地域での地道な国際援助活動も多く存在します。英国に留学中、その様な活動を行っている国際機関のひとつ、国連人間居住センター（ハビタット）のプログラムを調査する機会がありました。以下に、アフガニスタンとソマリアにおけるハビタットの活動を紹介します。

ハビタットの都市復興プログラム

アフガニスタンの首都カブールにおいて、ハビタットは地域コミュニティと連携した復興支援活動を行っています。具体的には、井戸の設置、端の復旧排水溝整備など、小規模の建設・土木工事を支援して地区環境の改善に努めています。90年代初頭以来長期にわたる活動は、地域コミュニティとの間に強い信頼関係を築いてきました。97年にはシューラとよばれる地区代表者組織が自主的にプロジェクト内容の決定、労働力提供者の選出を行うに至っており、ハビタットの活動が被災地社会の自立的な回復に寄与している様子がうかがえました。

一方、ソマリアでは土木建築の支援プログラムは実施されていません。より政情の安定している北西部の各都市においてハビタットは市役所と提携し、都市行政に必要な測量、土地登記書類の整理、建築製図、施工基準の管理などの技術移転を通して若手職員の育成に努めています。長引く混乱により技術者の払底が深刻なこの地域において、行政組織の再編・改善プログラムは本格復興の基調な足がかりになります。

あいまいな状況下での都市復興支援

これらの戦災都市の特色は、緊急状況は脱しているけれども、抜本的な復興開発へ踏み出せない、というあいまいな状態にあることです。つまり、ひとまず食糧やテントの緊急援助の必要性は去ったけれども、大規模な復興再建には時期尚早な状態です。プログラム運営は常に矛盾を抱えながらの模索となります。そんななか、調査した2例に共通するのは、地元の人々の自助努力を喚起し、紛争国において都市レベルでの安定維持を支援している点です。都市の安定が政情の変化によると都市住民の流動化を防ぎ、将来の平和構築への可能性を蓄える、との期待があるからです。

製図の指導をするハビタットスタッフ（右端）

専門家の役割

このような変化しやすい状況下で、そもそも建設行為の流儀が異なる街において、国際スタッフはどのようにプログラムに関わっているのでしょう。調査を通して感じたのは、求められる専門家の特性とは、建築・都市に関する専門技術そのものよりも、むしろ普段私たちが「建物を建てる」というプロセスに関わりながら体得する、「まとめあげる力」のほうではないかということです。すなわち、プログラムを回していく推進力、周囲に積極的なプログラム参加を促す力、そして、さまざまな関わり方をする人々の間を調整する能力の大切さはどんな地域においても普遍性を持つように思いました。

人と都市の結びつき

悲惨な体験を強いられた被災地の人々は、まったく為すすべを失っているのではなく、解決すべき問題を前にたくましく、したたかに生き抜いています。長引く不穏状況のなかでは親類縁者が戦略的に諸外国にちりじりになって危険を分散し、仕送りによって助け合う場合もあります。国境を越えた家族レベルでのグローバル化が進んでいます。一方、日本では、地域社会の見直しや住み続けられる街づくりが注目されています。人と都市の結びつきを考える時、果たして人にとっての帰るべき街とは、守りたい風景の思い入れとはどこまで切実であり続けるのでしょうか。これもまた、地域や状況を超えた普遍的な問いとして自らに返ってきました。

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083　東京都千代田区麹町2-6-5
麹町E・C・Kビル　㈱生活構造研究所内
TEL03-5275-7861 FAX03-5275-7866
メールアドレス　uifa@LIQL.CO.JP

DOCOMOMOの活動をご存じですか？

寄稿　◆建築史料の保存と公開に関する動向

東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻助手　中原　まり

DOCOMOMOの活動が、建築物や都市環境の文化的重要性の啓蒙にとどまらず、それらに纏わる史料保存の重要性をも提唱していることは、非常に興味深いことです。というのも、日本ではまだ、建築史料を保存し、それらを公開する体制が整備されておらず世界に大きな遅れをとっているからです。それはこの情報公開の時代にありながら、日本国外から日本の建築史料にアクセスすることが困難であるという問題を引き起こしています。ICAM（International Confederation of Architectural Museums、世界建築博物館連盟）は、1979年に設立された国際的な非政府組織です。研究や教育、娯楽に活用するために、文化的もしくは科学的側面から、建築に関連する史料を収集・保存・公開している組織の集合体で、それら相互の繋がりを強化することを目的としています。それ故に、建築博物館、センター、アーカイブ、コレクション、図書館等、多種多様な機関が加盟し、将来へ向けて、各々の立場から建築史料の保存と公開に関する問題を提起し、議論しています。1998年の時点での加盟団体は、29カ国から98団体に上ります。総会は隔年開催され、次回は、2000年に、リオデジャネーロでの開催が予定されています。

上述の通り、加盟団体は、RIBA（英国王立建築家協会）やLC（アメリカ議会図書館）のような大施設から、コロンビア大学建築学部所属の図書館のような大学関連施設、フィンランドのアルヴァ・アアルト博物館のような一建築家を対象とした施設など、多岐に渡り、その規模（スタッフ数に示される）や、歴史（設立年に示される）も様々です。総じて６割強の組織は、1960年代以降に設立されたもので、また、スタッフの数も２～５名程度と少なく、限られた予算に縛られながらも、自らが行えることを地道にこなそうという姿勢が伺われます。

日本からのICAMへの加盟団体は皆無です。今後世界的には、DOCOMOMO、ICAM、ICA（International Confederation of Archivists）等、様々な組織が協働して、建築物並びに建築史料の保存を促進しようとする動きが見受けられます。日本でも、建築史料の保存・公開の問題に真剣に取り組み、活動として興していく時期がきているのです。

■ちょっと一言

ユニバーサル・デザインを考える「レバーハンドル」

身障者の日常生活のバリアを除くために自助具というものがある。その中にはレバーハンドルのドアノブや水栓金具も含まれているが、この形状はどんどん一般の建築にも洗練されたデザインで採用されており、もはやこれが自助具として推奨されるかたちであるなどとは誰も意識しないだろう。身近なユニバーサルデザインのひとつの事例である。Ron Mace 氏らはユニバーサルデザインの７つの原則、Equitable use、Flexibility in use,Simple and intuitive use, Perceptible information, Tolerance for error, Low physical effort, Size and space for approach and use を提唱しているというが、建築や都市をこの視点で再考すると、様々な問題点が浮かび上がってくる。この様々な問題を乗り越えて、身近な生活道具から建築、都市にいたるまで、ひとつひとつを丁寧に考えデザインしていくことを積み重ね、連続させていくことで、ようやくユニバーサルデザイン的世界が構築できるのだろう。その際には異分野の連携が不可欠となることは言うまでもない。　（大高真紀子）

■東京女性財団　1998年度研究助成報告会

昨年の11月27日、東京ウイメンズプラザで、東京女性財団1998年度の研究助成報告会が開かれ、UIFA第12回日本大会報告のパネル展示を行った。大ホールや会議室では自主活動・研究の報告が行われ、広報スタッフはセミナー「住む」に参加。ユニークな発表者と活気あるかみ合った意見交換を行った。質疑で出ていたパックス（市民連帯契約）というフランスの新しい法律の成立が印象的。相続権は親族に限らず、ともに生活しているさまざまな型を実体として認めていこうとするもの。未だほど遠い日本にあって海外とのレースワークの重要性を思い知る。当日の出席者：中原、飯島、渡辺、田中、中村、井出。
（井出幸子）

■役員会の報告

第７回　10月15日（金）

出席者；中原、小川、松川、正宗、峯、山田、渡辺、吉田（洋）

・喜多方ワークショップ報告。参加者は案内者含め9名。
・この指とまれ一蔵前千潟見学について企画内容の検討。
・第19回海外交流の会「子どもと環境ﾌｫｰﾗﾑ」の役割分担決定。
・その他、千代田区ホームページへ登録、ＭＩＷの展示。

第８回　11月15日（月）

出席者；中原、小川、松川、東、正宗、山田、渡辺、吉田（洋）。

・第19回海外交流の会「子どもと環境フォーラム」報告、アンケートのまとめ、反省、トルコ地震の募金。
・第20回海外交流の会「Ｆ・Ｌ・ライトの建物見学」について。２月18日（金）明日館見学、2月19日（土）遠藤楽さんのお話。
・この指とまれ一蔵前千潟見学、参加人数の確認、体制。（吉田）

UIFA のＥメールアドレスが変わります
uifa@LIQL.CO.JP

■広報だより

五感に触れる体験の大切さは子どものみならず、我に重ねる。タリアセンからの便りに続いて遠藤楽さんのお話と明日館見学が楽しみ。**東京女性財団報告会のフォーラム「住む」に参加、住まいの社会性についても考えていきたい。寄稿「戦災と復興支援」、人間のおろかさの代償は巨大。地道な支援活動のもつ可能性を思う。次号で震災都市トルコ訪問の報告。2000年、**今年も皆さまからの多面的寄稿を期待しています。

（編集長：渡辺喜代美　編集担当：飯島静江、井出幸子、大高真紀子、須永叡子、田中厚子、中村陽子）